八宮ろふ

宇治巻 八

哥也詞を名ごきり

[V. 52]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 52
copy 1
Asian
Japan
Cage

LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

葉女四段ノ表より秋までを
りしこまは人ぐ（深母ノ）おもきぬをもとめさもげどうひ
なし。（住吉抱論）物語の姫君の人にぬすまれたん所にあ
やうなれば、くもしくもいひつゞけず。（母より）京よりきし
（つゞ）使のかへらずなりましかば、おぼつなしとて又
人をこをたり。（母ノ使ノ詞）まだ鳥のなくになんいでしたて
さきぬるとつゆひのいつる。（めれとん）いかにきこえんと。
めれとよりつゞめてあもてまどふこと限（うぎり）なし。
しひよりうたなくて、たゞ御ちぎあへるを。（右を仮定）かれ心
しれるどうなん。いたじく抱をしぬへりしき海を
しぬりに。所をなげぬへるとは、しよりはけり。なく
なくこれふことをあけこれば。（文詞）いとおぼつなさる。

まごろまれ侍らぬけるや。こゝろひは愛(ゆめ)まぐるまうち
とけてもいふぞ。もれまをそそられつゝ。心ちもれい
なしぞうゝて侍るを。なほいとおそろしく。もれ人
ひろせ給ひんことはちりくなれど。その頃ど愛(こう)は
むかへなりてん。そふは夜ふり侍ぬべかれば。など
ありよべ(浮ノ)のれかへりをもあけてこそ。なをいとじく
なく。されば(太を付)ところぼそきことは罪ん給ひり。我は
などかいはくかれこまふことのなりけん。おされ
かりし程より。露ころをかれなることなくなり
ぞりへぞてなくてあらひこゝろは。今はりぞりの
こちましも。我をくらかし。そしきをぐるこれ給ひ

ざりけるがつゝきことくせつまあしずるといふ
ことをしてなくさ雨。つゝき子だのやうも。いとじく
おぼしたる御気色ハ三なり（さてまつ）つゝれど。かけてもかく
なべてなるべず。おぼろくしきことおぼしよろん
もれとは。こしざりつる人の御心ざ雨をなをいかま
しつることまかと。おぼつるくいとじ。めれとは中
中もれもおぼしで。こゝいかさ雨まをんくとぞ
いとれける。家（白ん）まもいと例ならぬ気色ありし御
ゆり。いかませふなるん。我をさすがまあひせたるさ雨
ながら。おぼなるころなりとのこ。ふくうたがひ
これば。ほかへいきかくれんとまやあらんとおぼし

さらばそれ。つひありおりくぎりちすさし海とかう狩ま
さて。恋文まえなしず。いとあるぞとゞ下も女はとへで。
人のこゝろ織はうき緒は忘れば。袖も覚し緒はず。
されもしさへもおりしまきめおりあればさかゝひ
緒へゞはゞもみはあくりてあんまどひ緒といふ。
こゝろもかくさるぬとのこまそ。くそしうかとぞ
まりぬかくあんとやさせ。さるま。ゆ絶とおもひして
いとあやしいかくワヅしふともなさず。白ごろちるや
ましとのこまじうぐ。昨日のくりことはさるま
げにもちるそつゝよりもおりしげありしまれとく。
おもしやうくとあけきが。時方いさそ気色ぞうしり

ちりこくとひさけとのゐまへば。かれ晴方詞たゞ蓋舞いうきすう
ことゝもこ給ことゆけん。舞ねすゝきれどもいありり
あぢいましめおぼきこうとて。下べのまいり出る
ともごとゞめどひ給あれば。ことゆくおことあるて。
時方まいりこんと。あの家し給ふば。蓋ノおぼしおかは
すうことあぢや給ふん。さてまはりよ人のうき給
つらん所いかあすうさはじしく。人さびく給ふんとと
こころもぢ白詞りとていいと おぼつかすてやあらん。なれ
とうくさうんべきさ海よりまへて御のこころされ家
給う通るあぢるおのていかあすことゝ経そういかぞと
おありいさよ。下さまはひがとものゐまへば。

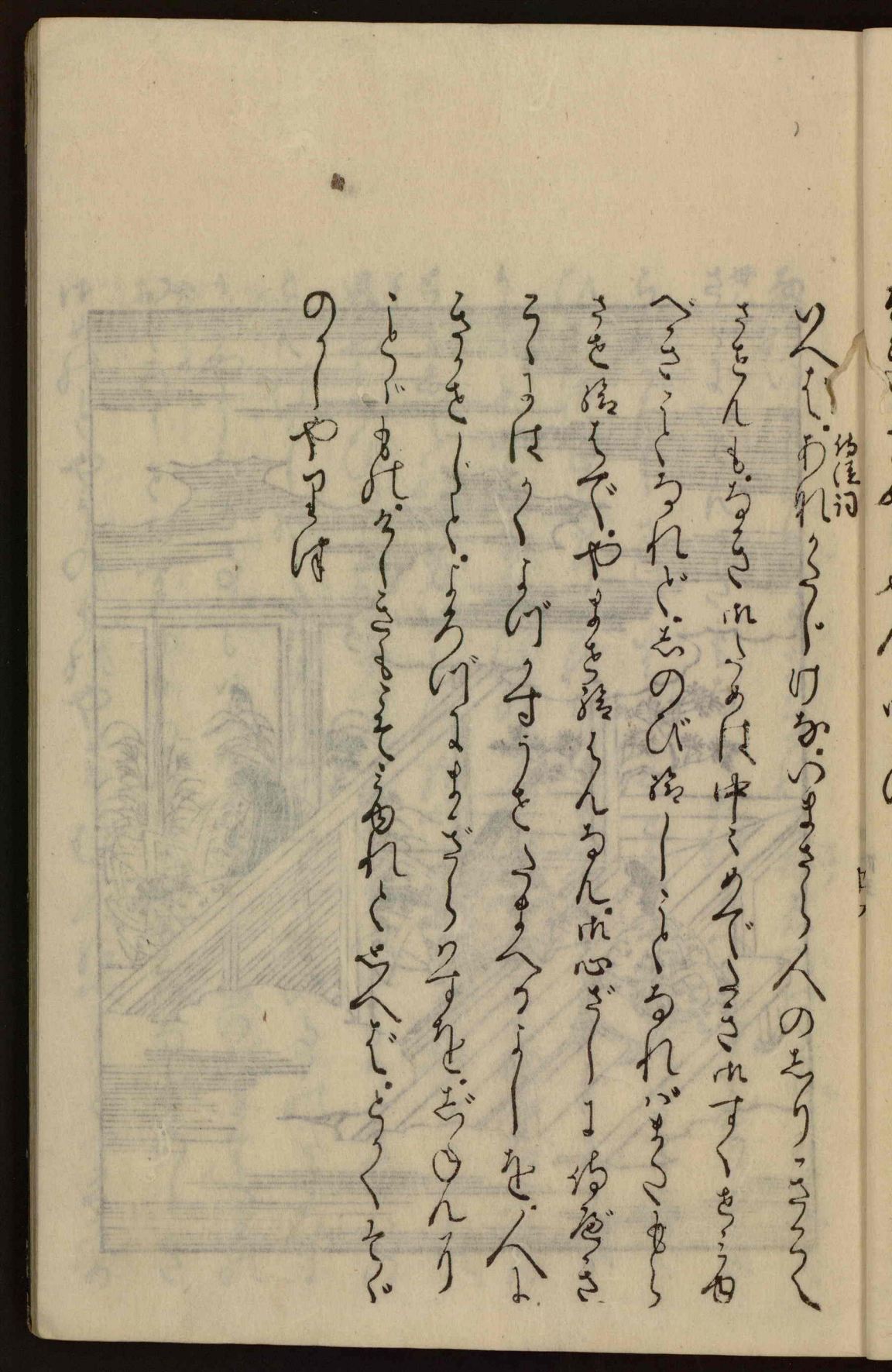
いとおしき山乱色もうつしけるくて。ゆふつかたの。
かやすきひとにとくいきつきぬ。面すうしふり
やみこれど。けりなきぬまやつれて。下すれき面まで
きこれが。人おほく立さはぎて。こよひやがて おさめ
なりなりなどいふを。きく心ちもあさましく。笑ひ。
なをまきうそこきこれども。えあはず。こ今もの
笑しず。おきあがらん心ちもきでなん。さらもこよひ
だりとそくもこちより。給はめ。えきそしぬことく
いまをこり。さりとてかくおぼつるくてを。いかぐ
物語らん。今一和ごまとをちまいひこれが。侍従ぞ
あひこりそり。いとあさましくおぼしもあへぬさ面

まてうを給はれば、いとじといふまもあらず、夏の
やうにて、これもくまどひ侍るよしかきせたまへ、
すこし心ちものどめ侍てなん、日比も抱えしたり
つるさ夜、一夜いと心ぐるしと思ひ給へりし有様
なども、思ひさき侍べき、これけぶらひなど、人のいと
侍るほどなりして、今一たび立よりぬへといひて、なく
ともいとじ、うちまもなくこゑぐのうして、めれと
なるべし、おがみ（めれと詞）やいづるまかりしましぬる、
かへりたまへ、むなしきからをごくまことなるぬが、かひ
なくかなしくも有れ、明くれこそまつりても、
あらず御ぼしたまひ、いつしかかひあるは、さ夜を

こなしんとおしこ夕まこれこ罪に法るりとて
いのちものび行つれおせてゐてかくり来もしき
給ふぬこと鬼神もあが君をぞえらくしじなら
じ人のいこじくおしむ人をば壽尺もうへし
給なりあが君をとりなさん人にまれをまくまれ
匿しなれなきれからをもこなしんといひつぐ
家がころえぬことどもまじ家をおやしをせて
狂のこまへ申し人のかくしも罪なへるかこし
うまこさしめさんとれ男のかたりにいぐしこて
さをなへるれ使なり今はとてもかくてもかひなさ
ことなれど後にもこさしめしあはすること乃

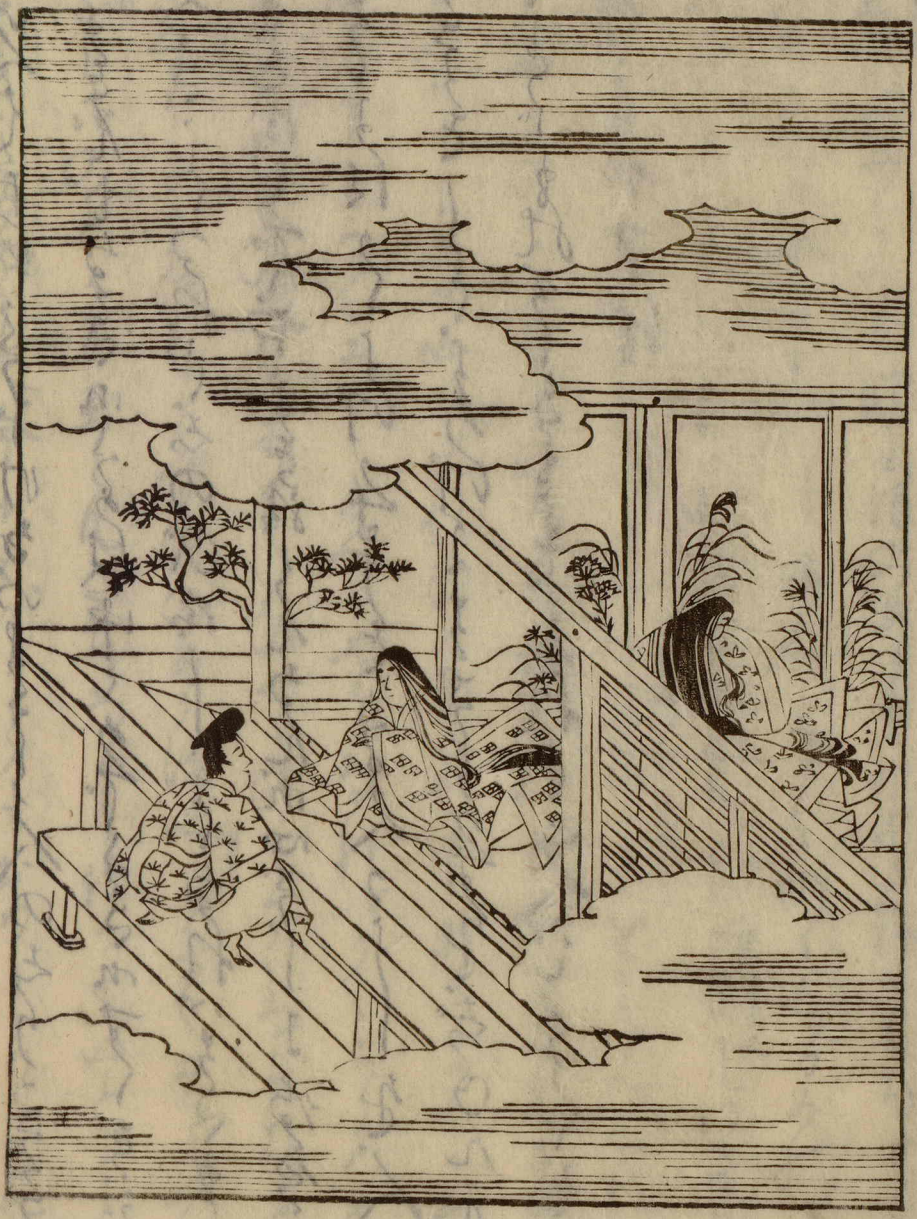
行くんまさがふくまじらば、来りたくん此使乃
つゝまなるべし、父さりともこれまをなて、君ぞちま
對面をよく仰られつる此心だんもかうじけなし
とはおぼされずや、女のこちままどひ給ことは、人の
此門まもふるきこゝあしぞ、あされど、父かうこと此世まハ
けらじとなんこなるといふまげ（仿淺詞）はいと哀なる此
使まこそあれ、かくすと使ともかくてれいたりぬ
ことのさ夜をのづから笑しなんとせて、なぞかいさ
さらそても、人やかくいなりぬふんと、さよるべさ
ことあらんまはかくしもあるかぞりまどひ行くん
日ばいといふじく物を笑しいるめりしかば、かれ

業
義のつゞりしげゝばのめし男ゝ語ことあれども
ありさま此母はまめし語人もうくのもろめれど
あさもまたじめありそめありしかはまゝげくり
語さんとあるんはそぎこちて浮白ゝはれこととだ、人もれぬ
さ後よのこゝろをけるく、おもれとやさふえさ給
あやりしよ此心こぶれけるあるべし、おさまうえ
心と身をあるあくのくつやうあるれバうく、うろ表
まどひよひゞくもくいひつゞけゝあるありと、
さすゞよまるあすはのあつ住心がくく、ずして、
詞
さつゞのぐるあんこまうあすゞし侍るもいとこと
そぶ、ころやう也、今此こゞうゝもおほくしましあん上



いへむ。おれかうじけなゐ。いまさら人のたりこさうく
さきんもちまきれしうめは中くめでたきれすくきこ由
べきことなれど。志のび給しことなれバまたもら
さを給ひで。やまを給ひんなん。れ心ざしは侍ぞさ
うしはかくよげ手うをうまへうよしを。人は
ちうをじとよろげまもざらかすを。ぢゆんり
ことじまれ。かしきもそこゐれとせへぞ。とくそぐ
のしやすは

侍従詞



毎れいらじかりつるまぎれは母君(浮ノ)のわたりおへる。
さらにいとんかたもなく、めれまへはなくなし。毎
らんかなしさは、いらじくとをもれつ。まてこぐ
ひあはるすなり。これはいましつることぞとまどふか
かることだれまぎれありて、いらじう抱き給ふらん
ともしらねば、男となげ給へらんともしをよらじ。
鬼(とま)やくひつらん。きつ。めくもれやとりもていぬ
らん。ひかし抱がたりのあやしき抱のすれことひは
う。さやうなるすもいふなりしとしいづ。さてはかれ
おそろし(女二ノ子)とし男ゆるあたりにこころなどあしき
はめれとやうのもれやううむかへ給べしと男て。め

ざ海しがりてだがりしら人もやあらんと下をなど
とうしがひ。今まいりのんしらぬやあらとさへ。いと
世ぢなれしりとてありならはぬひとはこゝろにて
ちらなきなすもえをぞ。今とくまいらんといひてな
む。みなそれいそぐべきなすどもなどつまぐしつ
へり出侍ましとて。もとよりあら人ごまうしへを
なくて。いと人ずくなくらおりまなんあらん。侍従
などこそ。日ごろれ法をしきしいで。方とうしなひ
てゞやなどなきいり給し。おりくれありさ海。うき
ときぬへらふことをもうらはなきうげまとうれすさひ
こまへ所もの。次のしるしまあらんとみつけて。河の

うたをみやりつゝひぐきのしるあれとととさく
まもうしと海しくかるしとおつゝさてうせぬひれん
人をとらくいひさはぎていづくまもくいつちかう
こまなり給まれんとおぼしうたがいんもいとれ
しれるといひあいせて思ひしることとてもはん
よりをこりてありしるすならぎおやまてなきき
のちまきて給へりともいとやさしきかどなるしぬ
とおりれまくまきてゝてかくいうじくおぼつかなれ
ことゞもをきへうたぐおまどひ給さ海にすうしあ
きらめきせ生しむなくなり給へる人とてもから
をきてもてあつかふこそよれつゝなれよづかぬ

氣色まで日ごろもへバさらにかくれあらじ。為綱望
て。今ハ世の望をとゞまつくろかんとうちひて。志の
びてありしさ海をまてゆるに。いふひともまていり
えいひやらぬ。毋ん まてくんちもまどひつゝ。さハこのいと
あらましとおもふ。河にたゞれうを給にかりと志ふ
に。いとゞ我もおら入ぬべきんちして。詞 おりしまし
にかんうことをうづ。てうらをどこにもうぐ志くた
さめんとのうまへど。志を詞 さらにあるにかひ給らじ。わ
志もしらぬ。大海の原にこそおりしましにけめさ
海もれから。人のいひつゝへんことハいとまてよく
しとまてゆれど。毋ん とさ海ううざ海におもふにむ

乃ききのぶらんちして、いうまもくまべき方
もたゞ[illegible]給ひぬを、これ人ぐ[左を結注]ふたりして、車よせ
させて、おましどもけぢかうつひ給しけでうど
どもみなぶらぬぎをれぬへ[illegible]けふまもまるどや
うれ地をもりいれて、めれとごの大とこれそれがを
ぢのあざり、うれでしのむつましきなど、もとよ
里しりうる老法師などけいえまうもうべきうぶり
して、人のなくなりうるけいひまねびていぶし
しうるを、めれと母君もいといらじくゆしとおし
まろぶ大丈うどねりなどをどし[illegible]しものだも
集りて、けさうそうれことは[芸]殿まことのよしやさせ

給て、日さぶめられて、いろめしうこそつうまつらん
などいひけれど、ことさらまこうよひすぐをまじ、い
（太を詞）
とものびてとしふやうあればなんとて、此車を
むかひの山乃まへなるからまやりて人もちろうを
よをず、これあるいしりしる法師のうぎりして
やうす、いとたうなくてけふりはたてぬ、ぬなう人ども
は、中こうぶことを、ことくしくしるし、こといこな
どあくすう拙なりければ、いとあやしう、例のさ
かうなどあるすどもしも給ひず、げをぐしく、
あへなくてをられぬるすうれとそしまれぞ、
（うこあやあるとこ）
うらへおはしろ人は、ことさらまうくなん、京け人は

志ぬなりなど。さ海ぐくになんやしらずいひなり。
かしこ海人どもれいひおもふことごとつくましきを。
ましてものしきてしかくれなるき世中に犬(甚)相殺
わたりにかくもなくうせ給にかりときうせぬるぐ
かなるずおも得しうたがふるもあらんを。家(白)をこ
おなじ作なりひまてさ海人のおりしれはきば。
志がしこそ志のぶともおぼき先つぬにハかくれあ
らじ。又さごめて家(白)をしをうたがひ罪し給ハじ。
いかなる人かぬてかくしかんなどぞおぼしよせん
うし。いき給ての作すくをは。いとけたくおぼし
人のげになきかげにいうじ知ことをやうたがハれ

給はんとせんへば、こゝのうちなる下ぐどもまを、けさの
あはれてしかりつるまどひにかしれもみきてつる
まそ、くちがこめ、何なかいしらぬにはきかせじなどぞ
毎ぞかりける、なぐしへてはこれにもしづやかに、あ
しさ海をも望してん、こゝ今はかなしさ、ちめぬ
べきこと、ふと人づてにきこしめさんは、粗いとく
おしうるべきなるべしと、此人ふるりぞ、ふる
くんのとまそひこれば、もてくしかる、犬ぬ殿は入
道の家のなりやゝ給はれば、石山にこもり給て、さはれ
給比殿なり、さていとゞうしことをおぼつかなうおぼ
しかれど、そらぐしうさなんといふ人はなり

なれば、かゝるいうじきことにも、まづ此使のなきを、
人めもこゝろうしとぞ思ふに、みさうの人なんなりて、
志かくと申させなれば、あきまし（慧心）きゝ地しぬるく、
此使それ又の日は、まづつとめてまゐりたり、いうじ此
ことはきくまくに、みづからものすべきに、かくなやこ（女三ノ）
給ことにより、つて志えてかゝる事に日をうぎりてこ
をりたれば、なんよべのことはなどかうこゝにをうそこ
して、日をのべてもさはことはもう地をいとうろ
らうなるさ海にて、いうぎをしれにかる、とてを
うくてもおなじいふかひなきなれど、とぢめんこと
をしも、やまがつのそし、里紙さへおふなん、こゝれ

しめもうしきなどうれむつましき大蔵大夫（仲信の）して
の給へり。此使のきこうまつけくを。いとゞ（たをん）いうじき
まきこしんうこなるきるすどもなれば。毎ごなるぞ
におぼゝれうるどりとうごとまて。そうぐしうを
いしへやらずなりぬ。殿（蓋ん）は狂いとあへなくいうじと宣
給まも。心うかりなるところなる鬼（とま）なるどやまむらん。
などて今までさる所ましへうつらん。しかずなる
まぢのまぎれあるやうなりしを。うくもなるを紀
しるまこころやまくて。人（白ノ事）もいひをうし給なりけん
りしとしふまも。ワがこゆくよづうぬこころのこゝろや
しく。此むはいしく覚え給。なやませ給あしうまかく（女三）

ゆことおぼしみぐるしもうしてあれば、京におりしぬ。
女二宮のゆくさにもわたり給はずことくしきかどうも
も侍らねど、ゆしれしと絶ちうきて侍れぞ
心のうごれ侍らねどもいふ海くしうてなど罪し
給て、つきをずもらなくいうじき世をなげき給ふ。
おりしさ海ふちいとあいぎやうつきおりしら
しけるひなどのいうじく逐しくかれしかれば、うつ
の世にはなどかくしもしいれぞのどうにてもぐし
かん。ふでいまはさらにしきづめんかたなきまゝにく
やしきことのかずしらぬかしゆことのすぢにつけ
ていうじう抱しべきすくせ如かり。さ海ことにて

ちざしたりしも此のかうまうくれいの人なりて
なぐらふ海を仏などのまくしとみ給まや人のんを
なこさせんとて仏此志ゐ方便(たうづん)ハ慈悲(ぢひ)をもつくして
うやうまこそハあるれと志つゞけ給つゝそこなひを
のこし給うれ家(白ん)をたゝまして二三日ハ物もお湯
給ひず うれし心をなきけまして いうなりけもの
れけるらんなどさりぐまやうく涙つくし給て
お湯しまづまりましもず ありしさ海ハこひし
ういうじくしひいでられ給ひる人まは毎ゞ此病(やまひ)
乃なもきさ海をのこみをてうくすゞろなりいや
めれそしきしらせじとうしこくもてうくすゝ

おぼしけれど、そのづらいとしるうりければ、いかな
ることはかくおぼしまどひ、此命もあやうきまで
しづこ給ふらんと、いふ人もありけれど、うれ殿(葉)にも
いとよくこの此けしきをきて給ふ、されば(葉ん)よる我
よそれ文うよりしのこゝはあらぬ成けり、みなてえ
うるらずさおぼしぬべうまし人ぞうし、おぼしへま
しうがたぐちるうりは、我ふめにおこなうことを
出きなましとおぼしをなん、こが御しむ○もすこ
しさむらんちし給ふ、宮(旬)の此とふらひに、日ぐに
まいり給ふぬ人なく、世のさいぎとなれる比、ことく
しきこきはならぬしひに、こもりなて家らざらんも

ひがえしるべしとおぼして乗り給。それしろ式アマ（源氏ノ才之）
家ときこゆるもうせ給ふれば、はなぢのぶくまで、
うせまびなるもこころのうちに衣にしみそへられて、
つきぐしくえ也。すこしおもやをて、いとゞ海め
しきるまきり給へり。人ぐまり出て、しめやう
なるタぐれなり。家（白ん）かしまづえてのえはなきはて
ちなれば、うときへにそあひ給ひ。みそのうち
にも例いり給人には、射面（えめん）し給ひずもあらば、見（芸）
給ふんもあいなくてまし。み（芸を）給につけても、いとゞ
海のまづをきがこさをおぼをど、しまづめて、おどろく（白河）
しきこうちにも侍らぬをえれ人つしむ置き

病(やまひ)のさ海なりとのこ抱きれば、内(今上)まもこやまをおぼ
しけりぐがいとくるしく、げに世中のつねなきを
をんがそくゑ侍りとの給て、そしのぞひまぎら
りし給とおぼしてなみだれやがてそぐこゑしずみり
おつれバいとさしこなけまど、かなしびしもいぞ
かきて給えん、たぐめしく、こころよはよとやん
ゆらんとおぼすも、さりや(恙ん)、たぐこれるをのこた
がれ例なり、いつよりなりなん、我をいるよおしと抱
きしひし給ん他に、月比おぼしわたりつらんと思ふ
に、これ君(恙)ハかなし、さは忘給へるを、こうまるくもをゐか
なるかな、抱のきちにおぼゆる時ハいとうしろめる

ようをてだに宣とぶ為れなきつゝろにも上様
されてこそうるしけれまがかくすごろにこゝろ
よりきまつをてもをしんをえらんにさいふだら
里掴れあはれもしらぬ人にもあらば世中のつゝみな
きこと後しらて世人法人しもつれなきとうら
やまり　くもこゝろにくらもおぼさるゝ掴うらまれ
ぐしらはあはれなりこれにむかひこゝろさ海もお
がしや海にうらんぞうしともうちまもり給やう
やう世の掴御所に給はいとこゝろてしもはあらじと
おぼして昔(河)よりこゝろにこゝろてしがしもきこゝて
させぬことのこし給うぞりはいといぶをくのう

おもふこまへられしを今ハ中々の上らうになり
て侍りまして御いとまなきはありさ海にて
心のどうにおりしまゝおりも侍しねば殿ぬなどに
それことなくてハえさふらハぬそこゝろとなくて
すぐし侍てなんむかし御読ぞし山里にたうな
くてうせ侍にし人(大)のおなじゆりなる人(浮)見えぬ
所に侍りときくつけ侍て時ごまでみつべくや也
也給へしにあいなく人(女二ノ子)のそしりも侍ぬべうりし
おり奴しかばこれあやし此所にとき侍しを花
さくまりてうるすもなく又うれもなにがしひ
とりをおひこのむ心もことになくてやありけん

とハみ給つれど、やんごとなく主のくしきすぢは
しらまへハこそあらめ、みるまもしごとなるとぞも
侍らずなどして、こゝろやすくらうしとおもひ
侍つる人の、いとたるなくなり侍まかるなべて此世の
ありさ海を忘給へつゞけ侍るまゝ所しくなん、さ
こしめすやうも侍るらんしとて、いまぞなき給。
あれもいとうハみしこそまつらじ、おこなりとも
つまどこゝがれそめてハ、いとしめがたくしきれ
いさゝみぐりがかなるを、おやしくいとおしと
おぼをど、つれなくて、いとあかれなるゝとまこそ。
旬ハかのまこさて侍き、いるともさこゆべくらも

四ノ十六

ひ侍りながら、ひぎと人にきらせ給はぬるまときて
侍しかばなんと、つれなくのたまへど、いとこへがた
かれば、ことずくなまておりします、さ(慧詞)ばかりこまても此
らんどさせじやと忠給へまし人になん、をのづから
きもや侍なん、家(ゆゑ)にも乗りかよふべきゆへ侍しかば
などすこしづくなし紀ぞこそ、此んち思いなからぬ事
どいまぐろなる世のことをこしめしいれ、此みしかど
ろらもあいなきひぎ(つとイ)になん、よくつしませたまへ
などぞ、ぞ、をなて出給ぬ、いろじくも(慧心)おぼし(旬ノ)なり
つかれ、いとたらなりかれど、さすがにしらき人の寸
くせなりかり、こうじ、此みど、紙(きばさ)のさぐりかしづ

きなりしまふみこう得うしちよりたゞめてこそ
いまの世にハこゝぐひおハせざめりと見給人とても
なのめならず。さ海ぐにつけてうぎりなきひと
とをさてこれに此こゝろをつくし。よ此人をさは
ぎて。ぞ法ど強まつりたゝへとみちくにさハぐハ。
これひとをお浮をゆりの此こゝちのあやまりに
しそハありけれ。我もかぐらり此身まで。時のみど此
此むをめをもちなりなぐらこの人此らうしくに
がゆうしこハをとりやハ志つる。まして今ハとお浮
ゆうにハ心とのどめんうしなくもあつかれ。さうは
かこなり。かしらじと思日志のぶれど。さ海ぐに

ちひみぐれて、人末石まあらざれたえれ情あり
とうちぞしてふしうまへり、後のしてしめなど
を、いとたれくしてぐらを、尼やまもいらぐさて
始らんといとおしくあへなく、冊ぞれなをくし
くて、たらからあるはなど、さやうの人はいふこと
あなるをおもひてことそぐなりなんうしなどこて
ちづきなくおぼせ、おぼつかなきもうぎりなきを、あ
里なんさ夜も、えづからきう夜かしとおぼせど、おのが
ごもりし始たんもびんなし、いさといきてこれ
へらんも、心ぐるしなどおぼし、見づふ、月こちて
なふぞ、ひとらましとおぼし出始、試も夕暮いと拙

あはれはおまへちりきたち花のかれなつかしきは
時鳥（ほとゝぎす）の二こゑだりなきてわたる。窓よりよそぐと
ひとりごち給もあるはが。（白ノ方之）きたの家はこうしにわたり
給日なりければ。こちがれをおしせてきこえ給
（慧）志のびねや君もなくらんかひもなきまぐれ
毎をきまこころかよそぐ。（白ム）家は女（仲）君はさ夜乃いと
よくまゐるを。あはれとおぼして。二面なりがめ給れ
里なりけり。けしれあるふぐれとみ給て
（白）こちが花のかゝるあたりはかとしぎはあらん
志てこそなくべかりけれ。わづらはしとうき給

如君（中心）これ（白と浮ふす）ことのなしきはこれこし里語てぞり衣
まあきまし紀ちりなきれ、さ海ぐまつけて、おしろ
ふりきなるは、我ひとりもれさひしらねば、今までて
なぐらふりまや、それもいつまでと心がそくおぼせ、
家（白心）をくれなきさ抱からへぶて語ふもいとふるし
なれば、ありしさ海などすてしいとりなれして
うたり罪し語、（中詞）かくし語しがつらかりしなどな
きこゝけらひこゝきこゝて語まを、こと（白心）人よりはむつまし
く衣なりこと、くしくうるけしくて、例ならぬ
ことれさ海もおどろきまどひ語（六巻ノ下之）和まてはれとふら
ひの人しげく、ちくおとゞ（タ）をうとの君遊ひまな紀

もいとうるはしきに。こゝハいとこゝろやすくて。なつ
かしくぞおぼされける。いと夢のやうにのみなを
いつで。いとにハかなりなることにかけてのみいづせ
けれバ。れいの人（時方）ごめして。右近をむかへにつかす。
（俗ノ）たゞごとにも。さらにこれ多の音（をと）けはひをきく
に。我もまろび入ぬべくうるしく。ふうきことの
とまるべくもあらねバ。いとわびしうてかへり給
にけり。念仏（ねんぶつ）の僧（そう）どもをこのもしきものにて。いと
かすかなるに。いりきたれバ。ことく（時方ん）しく。にハかに立
めぐりし殿ぬべどもしみとがめず。おやにくり
かぎりのこびしを。いれましびなりにしよと。忘

いづかもいとおし。さぶまじきことをおもほしこ
がるしことく。こゝろしくゐたてまつれど。おろかり
きてハ。おハし（白ノ）海しゝよれくれ。あ様いざう（浮ノ）生
なり給て。舟にのり給しけいひのおてにうつく
しかるしことなどをしたるに。こゝろづよ。人なく
衰なり。右近あひていうじうなくもことハりぬ。かく（呼方詞）
の給ハせて。此後になん来りきつゝといへバ。いゝ海（左を詞）さら
に人もあやしといひしハんもつゝましく。まいり
てもたゞぐしくきこしめしあきらむだろり。
もれきこしさまべきんちもし侍らぞ。これ此いみ
たてく。あらさ海にもなんと。人にいひなさんも。

すこしまつかいしかりぬべきかどになしてこそ。心
よりかの命侍らば。いさくかゝ志づまらんおりなり
なん。お酒をごとなくとも来り。げにいと夏のやう
なりしるすぞもし。かゝり罪しまほしきといひ
て。かふハうぞくべくもあらず。大夫(時方)もなきて。さら(詞)
にこれ法中のこと。こまかに志りきてしさせ侍らず。
抱のこころも志り侍らぞながら。ぞぐひなき御心
ざしとみえてまつり侍しかば。君ぞちをもなにかハ
いそぎてしもきてうけ給はらん。つゐにハつゝう
まつるべきあらりにこそと志給へしを。いふかひな
くかなしれ法ことのちハ。ひとくしれ法心ざしも

中々ふうさまさりてなんとうさらふ。わざとは車
などおぼしめぐらして。こそまつれ多まへ法を。
むなしくてハいとくおしうなん。いまひとしろ
まても多りこまへといへば。侍従(なを)の君よび出て。さは(詞)
多り給へといへぞ。まして(侍従詞)なまごとをうハきこえ
けをむ。さても程これはいとのかどまハ。いつでゝ海
せ給ハぬうといへば。なや(時方詞)ませ給はひぐきに。さ海ぐ
のはつしとどを待めれど。いみあへさせ給まじ程
はかしきになん。又うくふうきは契(ちぎり)まてハ。こまら
を給てもとそおかしまさめ。帰りの日いくどくな
らを。程一和まいりあへとせむれば。ぞうぞあり(侍従ん)

しかさ海もいとこひしうおもひ罪ゆるに。いる
ちらん世にはみなしん。かゝ海おりにとしたし
て来りなる。くろききぬどもきて。ひきつくろ
ひたるかたちをいときよげなり。もはこゞいま我
よりかたなる人なるなにうちたゆえて。色もうへざる
されバうすき色なるをもたきて来る。おハ世ましが
このあまぞ志のびて出給はまし。人志れず心よせ
きてしもれをなど志ふるを哀なり。うちする
らなくくなんきなる。文(白ム)はこの人まいまりときこ
しめれも哀なり。女君(中)にはあまりうたてあれバ罪
え給ハず。志ん殿(でん)におハしまして。わた殿におろし給

へり。あ(白詞)なんさ海などくりしうとハ世話に。日(仙法詞)ごろ扣
げしなげきし。ちまそれ夜なき話しさ海。おや
しきまでことずくなに。おぼくとのこもれし話で。
いこじとおぼせるすとも。人にうちいで話ことハか
こく。もれつこをのこ志話しけにや。の話をくこ
とも侍らば。夏にをうくんづよきさ海におぼし
うくらんとハ。思ふまへぞなん侍しなど。くりしう
きこゆ也バ。ましていといこじう。さるべきにて。
ともうくもあらましよりも。いかばかり抱を思ふらて。
さぬ名におぼ也なんとおぼしやるに。これをこつ
けてをきとめたらましかばと。ひきうへ泊んち

し給へどうひなし。(白詞)はゝをやきうしなひ給し
などは。などてめをとして侍らざりけんなど。拾ひと
よりたらひ罪しあらす。(白詞)かれ(白ん)巻数(者)はうきつけなへりし。
母君の返しとなどをきこゆ。(白ん)なまぢりの柏とも(白詞)は
らんぞざりし人(白詞)も。むつましく長はおぼさるれば。
(白詞)我もとはあれうし。あるさをもてはなるべくやはと
のなへば。(白詞)さて(白詞)はゝらんはつけても。柏のえうなしから
んをしなへれば。今これはたてなどすぐしてと
きこゆ。(白詞)又もまいれなど。この人をさへあらばおぼせ。
あら月かへるまかれ(白詞)はしうまとて。まうけさせ給
へりけるくしのをこ一よろひ。衣ぞこ一よろひ

をとり抱にをさせ給。さ夜ぐにをさせ給ことも
おほかりかれど。おどろくしかりぬべかれば。さぐ
これ人におほぎろ程ありかり。なまごろもなく
ありて。かうことぐもれあるを。人をいかぐこんす
ずろにむつしきわざかれとしもぶれど。いか
がはきこしかへさん。右をとかろう思びてこゝ。
つれぐなるまくに。さ夜かにい夜発しう。し
あつめたることぐも候えても。いうじうなく。さう
ぞくもいとうりしう。しあつめたる抱どもなれば。
かろ此ぶくに。これをいかでかかくさんなど。もて
わづらひけり。ちゐどのもなほいとおぼつかなきる。

おぼしあまりておりしたりこちの程よりも、芳の
ことぞうきにけめつゝいかるうちぎりにて、このちゝ
見ゝこのれもとまこそめけん、かうしひかけぬにて
まぐしあつかひ、これゆうりにつけてもこれをのゝ
しふよいとこうしくおもしあたりに、仏をしるべ
にて、後世をのゝ契しに心ざしなき末のこがひ
めに、しきしうすうなりとぞおぼゆ、右を見し
出て、[illegible]けんさ内ももうぐしうきうず、杖つきを頃
あきましうもうれかれがいゝのこうりもすくなすく
なりぬすぐしてとしつれど、しづめあへず抱し
けうなりいかるう心ちにてかよいかにもうなくなり給

ましらひ給ふ。尼君なども気色ことなれハ。つゝみ
きくあまたを給はんと。中ゝこそもこそはゞかれ
きこえんはそこはかとなるめべし。おやしきこの
すぢはこそ。見ぐるしもめぐらしいつくちひしが
くまめやかなる御気色は。さしむかひきこえても。
るてどいかんくいかんと思ひまどひしほどだ
ともわすれ。ひがくしうおぼしみだれば。まし夜の
こゝろ女給へていへ。おさまりしうおぼしけぬすぢ
あまりに拙まくどうりの給はず。さるはあしくしおば
ゆかれ。すべてのひとのいふことをも。なほなく
ことすくなるは。あはとなりし人こいぞさるか

おぼろくしきことはいふべきぞいかなるさ海ま
は人ぞまてなしていつまかあらんと此心もこぞれ
まさりぬへど家(句)もおぼしなげきたるしきいと
しるし。そこの有様もしろうれなしつくりたらん
けしひはをのづからしぬべきをうくおりしまし
たるまつけてもかなしくいらじきことをかみ
しまれ人つどひてなきはしぐをときくぬへぞ
此(芸詞)をまぐしてうきたる人やあり。猶ほけんさ海を
たしかまいへ紙をとろかなりとおもひてそむき給
ことはうもあらじとなんせふいかやうなるたち
まちまいひしらぬことありてかさりはざはし給

たん我なんえたんずまじきとのこまんバいとく
おしくされどよくいづらしてしくて(詞)をのづら
こさうしめしけん。もとよりおぼすさ夜なしで。おひ出
ゆゑりし人の。世ぢなれたるれすまねのうらいつと
なくもれをのこおぼすめりしかど。むさうにもかく
おりしますを。行きてしさき給ふ。もとよりのれ方の
なげきをさへなぐさめ給つくうろのどうなるさ夜
にて。時ぐもこなりをゆべきやうにいひしかと
のこゝしとる出ていの給ひ。おぼしいたるめり
しを。そのれはいかなるべきさ夜にうけさ夜たる
ことぞも侍しにかくてさふしふんどもくうれしき

ことゝ也ゐへいそぎ。かれ川くち山（浮舟を云之）も。かしうして
こゝろゆきこゝろくしきまて。けこゝせ給ちんことを
いとゝなゝ也こまへしゝ。こゝろえぬれせうそこ
侍なるゝ。これ母ゐなどつゝうまけるもれどもく
女家こちらうがたしゝなりなど。いましめおほを
らるゝことなどよて。他の心しずあらくしきゐ中
ぐどものおやしきさ海まとりなし。罪ゆることだ
侍しをその後（のち）久しうれせうそこなども侍らざり
しゝ。こゝろうきもなりとのゝ。いたけなりし
ほどよりしきるを。人かずまいでこゝなきんと
のゝ。こゝろづるしあけひ給母君の中こゝなることの。

人ひとはれまなりとてがいりまゐなげんなすぐ
をもむけてなんつゐまなげき給しそのすぢより
かまなまごとをかとゐのへよりまへ侍らずなん。
鬼(をに)などのくしきゐともいさくかあるところも
侍なり抱をとてなくさ面もいとゞかれがいり(羞心)なり
ことまかとまぎれつゐ此ところもうきてききあへ給
いず。我(詞)は心は身をもまりをず。けそう(見祝)なりさ面り
まてなされこそ有様なれがおぼつかなしとおもふ
ありもいまちかくて人のこころをくまじくめやせ
ささ面にまてなしてゆく末なぐをとゐのどめ
つてすぐしつるをどろかまゐなし給けんこそ。

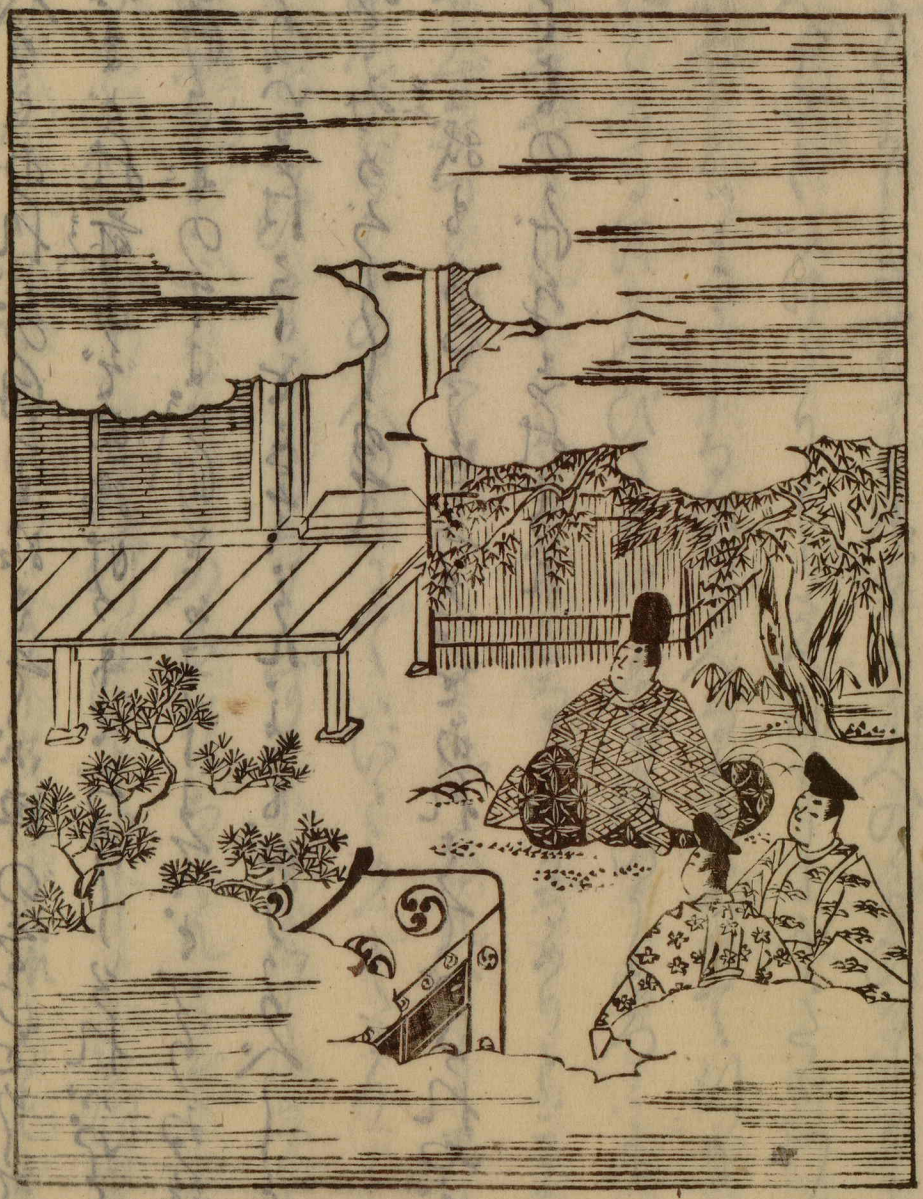
中につくるありけるとなげゆれ。今はうくぶる
いたじとせんど。又人のきらばこそあらめ。句 安のれ
ことよ。いつよりありそめけん。さやうなるにけけ
てや。いとうるまる。人の心をまどりし給安なれば
つゆにあひ〻なるぬちげきに。身をもうしなひ
なへるとなんせふ。粮いへ。我にはさしるなくし
そとのなへば。志をふしりるこそはきくなてぞれや。いと
いとおしくて。いと 詞 心うきこときうしめしけるる
こそは侍なれ。右をもさふしちぬありは侍しぬ。なれ
をとなぐめやすしひて。を 詞 のづらきうしめしけん。
この安の中人のれぐるに。志のびてつくしをなへり

しなぬ。あさましくしかけぬほどり。いりおもし
ゆりしかど。いらじきこと絶えてさを作て。いで
させ給ふき。それまをぢぬて。かれあやしく作し
三条ノ小家
所まいたしせぬりしなり。その後をとまも罪
じとおぼしてやまましを。いかでかきりを給けん。
たゞ此二月（きちらざ）ばかりより。をとづれ罪さをぬへし。
此文いいとこびく作しかぞ。此らんじいふく
ことも作らざりき。いとうたじけなく。申こうしそ
あるやうになどぞ。大をちど罪させしかぞ。ひと
こび二こびや罪さを給けん。それよりかのことは
ぬへずとゝそしさす。かう（苦心）ぜいりんし。しぬて

ともんもいとおしくて、つくぐとおもふがめいく。
白
家をめづらしくおもれとせひ置てもつが[illegible]を
さすがなをろかなせもざりけるほどに、いとおさら
むる所なくおもふげなりしころにて、この水の
ちかさをたくらりにてかくせるなりかんかし、つが
こゝにさしたるちすへざらましかば、いこじうなさ
せるふともいかでかかるしずかさ苔をもとめ
いでましと、いこじ辛うさ水のちざりかれと、これ
河のうとましうおぼさるしこといとふし。[illegible]
衣とせそめたりしかたにて、おもさやまぢをり
くりしに、今は又心うくて、これ星の名をぶるえ

さくまじさ心ちし給。宮のう人のあひがめし。
人がさとつけたりしさへゆくしう。たゞ門が
あやまちにうしなひつる人なりと。さまてけれ。
母ちくのる代かろびたる祈まて。後のうしろこもい
とあやしく。ことそぎてしるしけるなりと。こころ
ゆかずしつるを。くちしくさて給はるん。いかに思ふ
らん。さもたりの人の子までいとめでたりし
人を。思ひたることはかるしずしもえしらぬ。
我ゆかり女二ノ子にいかなることのきけるなんとぞしぬ
なるんしなどよろげにいとおしくおぼして。
けがひといふことはあるまじそれどれともしれ

人めもあれバのぼ里給ちて此車のしぢをめして
けまどれ前(まへ)まぞね給けるもこぐるしかれバいと
しげき末(こ)の下まつけをおましまてどがりね給
へりいまはこしとこそこんことも心うるべしと
のこみめぐらしぬて
我(蓋)もまたうきふるさとあれはてがこれやど
里末のかげをしれぢん



あざりい両も律師ありかりめしてこの法事
のことをさせ給。念佛の僧のかずそへなすぐ
をさせ給。けこいとかくちかつぎとおぼせば。
かろひべきことをぞすべき。七日くに程仏く
やうすべきよしなすぐ。こ両かなのまて。いとくら
うけりめるなくり給も。おらましかばこらひ
くらんやいとのこちん。おまえをうそこをさせ
さまへれど。いとも(弁詞)くゆくしさ方をのこ心つまへ
しづこて。いとゞもれも心のへられずほれ給てなん
うけがしぬして給とて罪てて。いでこの(慧ん)が志おても
立より給ひず。為すがらとくむ人とり給ひ後(なり)に

けうことくやまう水の音れきゆうぎりはこころ
のこさはぎゆてかしをぎるこづ○ぎちりはけう
こしおさましくてもやこぬうれいかるうさ海
まていづれのそこのうけをまじりけんちどやう
うるくおぼす皮(かれ)母君は京(浮母)は子うむべきむすめれ
とまより。つしこさはげぐれいの家(常陸ノ家之)にもえ
いかず。さぐろ(三条ノ小家ニ)なる猿(えび)ぬのこして。ふなぐさむありも
なさま。又これもいかるしんとおもへどこいしうま
うこてぎり。ゆくしかれバえようず。のうりの人ぐの
うへも見しず。ほれまどひてすぐすま。大(葱)将殿より
此使思ひてあり。抱(浮母ん)見しぬ心ちまもはとうれしく

あられなりおさまし（久句）さしくいまげきてむと思
ゆへしを心もれどまらず。先もくらさ心ちして。
まいていかるやこまか雨どれ給らん也。その
ほど紙すぐしつるに。ちかるくて日ごろもへにけり
ことをなん。よれつゐるさも。いとゞ心のどめんかるな
くのこそべるを。心ひのかゝ（かゝ）にもながらへ。すぎにし
なごりとはかるらずさうへさしくにもうづゐゆへ
なぐこ雨かまかさのて。れつゐひには。かれ大菊大史（おほくらのこ史）
をぞ（仲信へ）ゆへりけるこころのどうよ（大菊詞 芸ノ作を云へ）ろげをしつく。とし
げにさへなりにけるほど。かるらずしもこころざし
あるやうにはこ結いざりけん。されどいまよりのち

なるごとくにつけても、ゐるしばにすれ冥しじ、まる
さやうに低人きれぞ、せさてゐへ、おさなさ人だも
あるるを、おほやけにつうまつらんにも、必うしろミ
せべくなんなど、玄紫にものゐへり、いさくしもいひ
まじさけがしひなれば、ふうもふれ侍らずなど
いひなして、をめてよびすへたり、浮母返なくしく、
いとじさことにしなれ侍らぬ命を、こころうくし
こまへなげさ侍らも、かゝるおほきごとこゐべかり
けるにやとなん、さしごろは心ばそさありさ面を
こゝまへなるがしそれは数なしぬこのをこゝろりり
せゐへなしつゝかたじけなさ、ひとことを、り

すゑなかくされこ罪しさを侍しまいふかひなく語
もてくも里のちぶりもいと心うくなるしくなん
さ海ぐまうれしき仰(おほせ)ごとま命のび侍りて いま
しばしながらへ侍らばなをこれこ罪し侍るべきま
こそと心ぬかるまつけてもめれまへの洞まくれ
侍て えさきてさをやらずなどうさらり 冊(冊ん)つかひり
なべてのろくなどいこぐるしきほどなりおかぬ
心ちもすべかればかれ 芸(芸)まこそまつらんと心ざして
侍(侍)もとりけるよきりんさいのおびこちのおうしき
なぐ 袋(ふくろ)まいれて車まのる行これは芳の人(侍)の
此心ざしなりとて とくしをてがり 芸(芸)まはらんど

さすればいはゞすゞろなるわざなれとの給ふ。しだい
さいぶるあひゆりさびてびらびらとなく
よろけのこしのすそがさゝとものこしまで
哀をしられながらもしいてさまざまうずるぬ
思ひばけといはしもづらうぐ人はあるりゆへちからは
しらをなゝらで。おやしきさま夜ごとごとまいりつるを
かそぞさふらふをきんとあん抱し給ひつゝと宮内。けるは
こゝあうことあるさゆゑりむつびよぞおくべきなれど。
たんごくよりはぢくりの人の娘なしずやは。それは
さうべこそてとさめしあげさんねさず人のそち
べきことはべるべうおやしきさま世わり

まゝうちなどを。もちゐるさぐひおほかり。かれ常陰なん。
姫(むすめ)なりかりと。人のいひなさんよも。けがもてなしの。
それにけがるべくありそめこゝろがこそおこめ。独(ひとり)の
子をいとゞこゝろにもして。むかしんおやのこゝろ。
れこれゆかりこそおもゞしかりかれと。むしる
ばかりよういはかなし。須ミすべきことゝおぼせゝか
三京小家しこゝにはひとちのうゝこゝちながしさて。常陰詞おりむも
くてゐゐへることなんともしゞ。さしゞろ
いづくになんおもすらなど。おりのまくにもむしを
ざりかれば。もうなきさ波にておかすらんとむいひ
けるを。母(ん)京になどむ(浮を)人にて後。めいぼくありてなど。

しうさんとさけるほどに。くれど。今はうくさんも
おいちゃくて。おりしさ夜ちゃくくうる。志ね殿のは
ふことをさり出てこすれば。常陸を云へ よき人しうくさて。
日ちゃびもれめでする人まで。おどろきおくして。
うち色しく。常陸詞 いとめでこきはさいもいをすてく。
うせ給ほける人かれ。をのれもとのべまてまいり
つうまつれども。ちくめしつゝひ給こともちく。
いとけさくおもする殿なり。ひきもれだのこと
おほさしれこるはこれもしきことまなんなど。
よろこぶをこうまも。母ん まして 浮ノ おもをましうぞと
おもふに。ふしまろびてなる。常陸 うこもとなんけちゃ

けり。さるは（笑ん 地ん 浮ノ）おもしをし世にハ中とかうさぐひまひ
人しも。さぐ〇ぬべきよしもあらずかし。つが
あやまちにて。失（うる）ひつるもいとおし。おぐさめんと
おぼすよりなん。人のそしり〇んじに勢〇ぞと
おぼしけり。四十九日のつぎなどをさせ給ふも。いか
なりけんことにかはとおぼをばとてもかくても
つこうまじきことなれば。いとしのびて。此里（徒師）しの
寺にてをさせ給けり。六十僧（そう）のふをなどおほさま
ときてられたり。母君もきいて。ことごもそへたり。父（白）
よりハしをがもとに。しろか〇のつぼかり。こがね
いれてぬり。人ことがむぐらりおほさまるつぼは

えし給ひ、なをが心ざしまてしたりそれば、こゝろ
しらぬ人はいつでかくなんなどいひけり。愛(蓋)のひと
どもむつましきうぢりあまるゝまへり。おやしく
とともきざりつゝ人のもてをかくあつかうをまふ
これなるんといまおどろく人のミおほうゝ。
ひとちれかえこさて。心もなくあるじがりをうなん。
おやしと人ごゝけり。お将(たを)の子(常陸ん)うまをて。いかしき
ことをきせむとくまどひ。家のうちよなき物はすくな
く。もろこししらきれかざりをもしけへさるよ。かざり
あれバいとくおやしうりかり。これ此法事(かうじ)の思ひ
こゝやうよおぼしこれど。けそひこゝよなきをこゝる。

いさゝかしましかば我身をあらぶべくもあらぬ人の
此すくをあらはりとしふこゝやのうへもず經し給
七僧のまへのことをさせ給なり今なんかゝる人を
こまへりなりと此門までこゝしめして、そろうまも
あらざりけるへを家にしこまりきてて、かくし
をさ給けるいとおしとおぼしけるふたりの人の
此心のうちふりぎかなしくおやなくなりし此
此此ありまかさてていとゝいとゝしかれどあぐ
なる此こゝろはなぐさむやなどこゝろこゝのふとも
やうくなりなり此殿はうくとりもちてなまや
かやとおぼしてのこりの人をもぐくまをゐても稱

いふひあきこゑをきすればくおぼす。給の家の
れこやうづくのほどハ、れうてゝおりしますま。二の宮
あん成るはあり給はけう。なをもくもうてつる
うしも走り給はず。これ宮さうぐしくもおもひあはれ
あるまゝゝま。一品の宮のれくれをあづさめざらるは
しめふ。よきこ人のくちばもえまほりこ給ふぬ
のこりおぼり。大将殿のうらうしてゞ、ひとまびて
くにちを給。小宰相のきみといふ人がくちあどども
ゑてのげあり。こゝろざしをあかくの人とおぼされり。
なあじこくとくきちゝすがまとまちをども人は
いまきり。文をこえ抱うちひさしもおしあゝめしを

なんそへたりける。これ家も年代いといたき拙にしなして。
例のいひやぶりなへど。なぞうさしもめづらしげな
（小宰相ハ）（句ノ好きを云）
くはおくんとこころづくしのうきさ海なるを。まめ
（蓋ハ）
ぐいすうし人よりことなりとおぼすまなんなけり。
（小宰相ハ）
うくもれおぼしたるさ海もうしりそれば。しのび
あまりてきこしたるも
（小宰相）
あくれしるころは人をくれるど数なくぬ
（我を深くうへたりとも）
所にきこつくぞふる。へ。たらばとゆへあるかみり
（蓋ハ）
うきたり。拙表なる夕嘗。しめやかなるほどを。いと
よくなしたりて いひたるもまくうしぞ
（蓋）
つ。なしとこころ世をうるうき男ぞ人乃

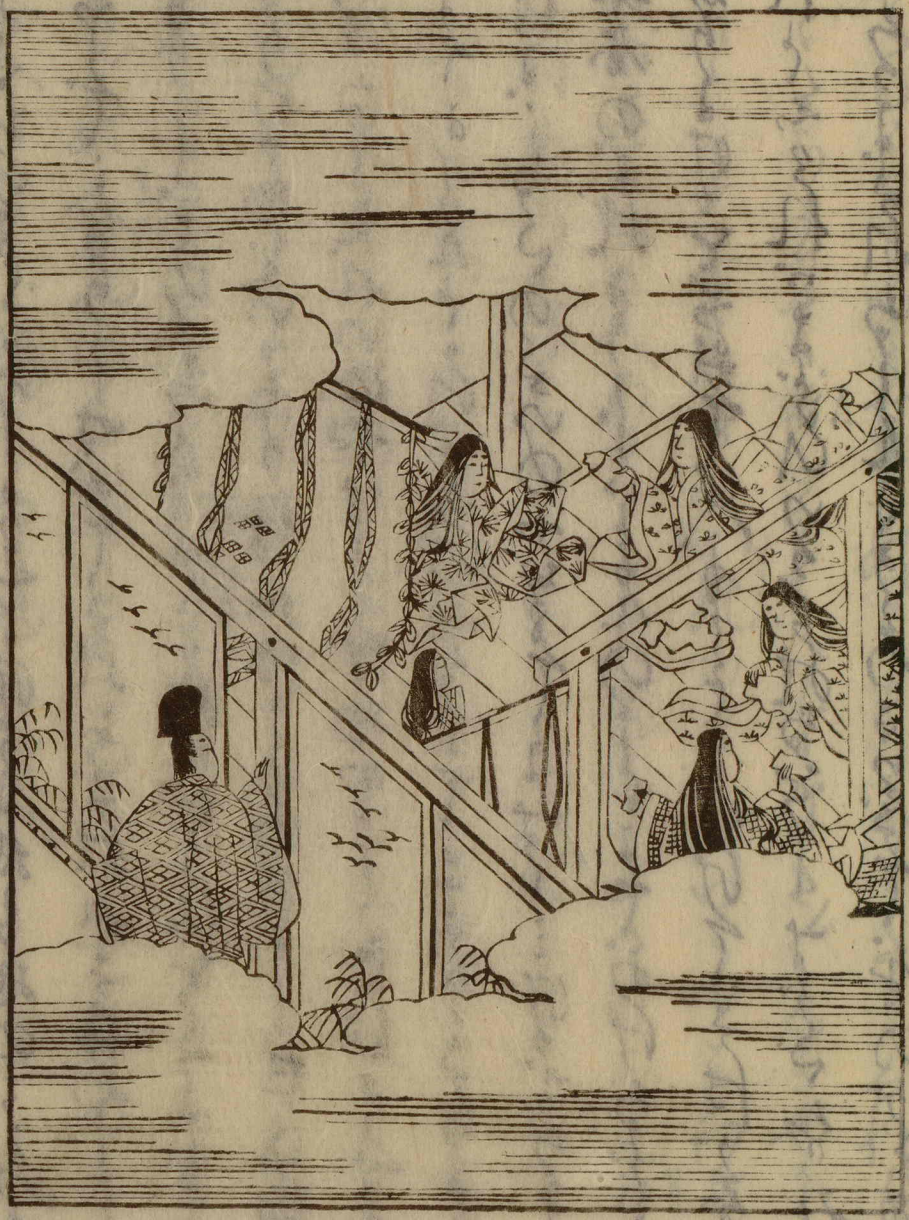
たりまでなげきやいする。これよろこび。長なりし
おりうらもいとゞなんなど。いひよこちよりなへ。
いとたづしげにもれくしげにて。なべてか
やうになどもなりしなれぬ。人がらもやむごと
なきに。いと拙たるさすまねなりし。つぼ口などに
いひて。さげくほどなきやはゞぐちによりぬなへる。
かたいらいたくおぼゆれど。さすがにあまりひげ
してもあらで。いとよきほどに拙なるどもさしも。
こし人よりもこれは心にくきけそひてもあるかれ。
などてかく出たちけん。さるもれにて我もといふら
まし拙をと見給。人しれぬすぢにかけてもこせ

結もず。もちすれ菜のさりに。此八海をとり。六条院
のれたあ。むらさきのうへなど。これおぼしつけつ。
此程佛などくやうぞさせなて。いみしくさうさく
なむ。をけり。又幾の日などいとうじさん拘なりければ。
こなるゝかなる女房につきて。しまりてもれたる人おほ
かりかり。又日といふあさ座にそて。此堂のうざ里
とりさけ。此しつらひあらたむるに。水のひさしも
ちうじどももなちたりしかば。これいとこちて
つくろふほど。六条院ノ よしのつゝ度に姫女おりしましかり。
拘さくごうぎて。女房もとのくつぎ目にありけ。
此まへはいと人ずくなるゝ夕ぞれり。是に大将度なを

しきへて、[恙ん]ふまんげ分給の中より、かならず
の給べきことあるよりつりどのくらうおりし
ろまこれまうでぬれば池のうますぐこまて、
人ずくなる分まかくいふ寧相の君などかりそめる
本性などづりへぐてくうちやもむ、うへつぼ申し
たり、こゝまやあらん、人のきぬの音すると覚して、
めぐうのうのさうじのほそくあきたる分より、
やとしこまへだれいさやうの人のねたるけもひ
まはまず、それぐしくもりしひこれだ、中こま
丁どものこてちぐへたるあもひより、ことをされて
あらはなり、ひ[水こ]をもれてつたるとさてまうとてまて

きぐ人ぐ、かとれ三人ぞりつくとゐたりから
きぬもかぎみもきぬ、これうちとけこれが、れ前(まへ)とは
こ給ちぬ、ま、志ろ(ぜーこ)きうす袖のれぞきゐる人の、まる
ひ(氷)をもちなぐらかくあらそふをすくしきこゐる
れかれいたんかるなくうけくしげるるもいとあれ
これこへがたき日なれば、こちたきれぐしのくるしう
おぼさるくまやあらん、すくしこるこまなびかして
ひかれこるほど、ことへんもれなし、こくらよき人を
こあつむれど、まるべくもあらざりとおぼゆ、れ
前(まへ)なる人は、夜ことるつ(土)ちなどの心ちぞしるを、
ふしげめてこれば、きなるすくしのひとへ、うしを色

ゐるもきたる人のよういあしんかやとゝこゝて。
中ゝ柏（氷をワクナリ）あつひまいとくるしげなり。（小宰相詞）さゞさるがら
こゝ人かしとてけしひたるまゝ。あいびつきる
まゝ。（慧心）こゝきくまぞこの心ざしの人（小宰相）とはしりぬる。
心づくけりて。あどとまもたりかしらようらとき。
ひきまさしあてなど。さ夜あしりする人もある
べし。これ人（小宰相）はかゝるつゝえて。（女一ノ）此まへりもかくて
来しをこれば。いとうけつしをはてをさしやりぬて
のごとを語。（女一詞）いるまもたしじ。しびくむつしとれ語
此こゝ。いとほのまきくもかざりもなくうれし。



まぐちいさくおかしまきて御どもは我も地のこころも
しらでこなりし時めでこれらだれ御さ間やとこ
なりし。そのうちこそこれ御けしひとぐること
ざりつる地といふるう神仏のうるおろしこせる間
へうるらん。れいのやすらず地おもしをひとすう
まやあらんとうけいたげ心なくてまもりこちらう
行ほこるるのこいのかおもてはすぐこけう下らう
女房のこれさうじいとるんのことまて。おけちがら
ありまけうを。忘れて。人もしてこつけてさはがか
れとしかれがまどひいう。これなをしすぐるをみ
こうるは。これなるんとこころさいざて。をのがさ間

そこひことも思ひずまれこよりこゝにきまゐれば
ふと（恵心）こちさりて誰（れ）ともえしじすきぐしきやう
なりとせて、かれぬぬ、これ（かりとん）おもとはいうじきつぎ
かれば車をさへあらちまひきなしてげなよ（ヌ）だ
のおほ夜の君ぐちなるんうとき人もるこゝまで
くべきまもあらず、まめく男もあらばこれかきうじ
あけこりしとかちまらずいできるん、ひとへもをか
夜もすゝしなめりとえしつる人のれすぐるなれば
え人もきてつけ給ひぬなるんかしと、ぢぐうぢて
とりかれ人（恵心）はやうくひじ里になりし心を、一ふし
こゞへそめて、さ夜ぐなる物せふ人ともなるかれ、

そのうえ世をそむきなましかばとハふるき山ゝ
すゝもてゝ、かく心こゝぐらましやハなどおぼしつゞ
くるもやすらぬ、などて年ごろ年しぶやとむ
つらん、中ゝくるしうかひなるべきもぞこそと
おもふ、いとめてあさぬへり、女二 女宮のれうちいと
おかしげなめるも、これよりかなしずまさるべき
ことかもとこゝしなぐら、女一二 さらに此給ち須こそあり
かれ、おきましきまであてまえもいハざりし、女一 れ
さ夜かれ、かゝへもせひなしかおりかしかとおぼ
して、いと 差詞 あつしや、これよりうすきれぞなれ、女ハ
例なるぬ抱きたるとそ、時ゝ入りつけておかしかれ

とて、あなたに来りて、[女三ノ女ゝ]だ紙にうす柏のひと人の所ぞ
ぬひてまいれといへとの給ふ。[女二]前なる人もこの所
ならのいうじきさうにおいしますを、もて
もやし罪し給とおかしうせへり。[女三]れいのゆんずし給
我ゆゑにおいしましなどして、ひろつる[女二へ]ひろり
ゆへれバ、の給つる所ぞ所まゝりうちかけたり。
[黒河]なぞこはなしぬ。人おほくこゝ時なん。すきたるもの
ゑたるハ、もうぞくにおぼゆる。こゝいまハあ色なん
とて、手づからをなり給ふ。ちゝ所も昨日のおなじ
くれなゐなり。[女二]ぞしのおほさ。すそなどはをとり
給ふ。ほどなく我さ所ぐなるにやまるべくもあらず。

ひめして。人ごとにつしを給。さりてひとつまりなど
し給心(蓋ノ)のうちもおかし。思ふよりきて。こひしきさ人
こう人なくやはきけり。ましてこれはなぐさめんに
まげなるゝぬ此頃どぞうしとせんど。昨日かやう
まてつれまじつまね。心にまかきてこまらましかばと
なげゆかに。心にもあらずうちなげかれぬ。一品宮(蓋詞)に
此ふこはこそまつり給やと申しかへば。内(女二詞)にきし
時。こへのさの給しかばきてしかぞ。久しう
さもあらずとの給。さて(蓋詞)人になしを給ふとて。
かれらりも申しさを給ふぬにこそは心うかなれ。
以後大宮(以前中宮)の此前(まへ)まで。うしこ申しさを給とけい

きんとの絵ハ、くげ根きこんぢうてとのおへだ。
下さるまちありさうとて、見しおとらすちありと
これバ、おどろきし男ぞめとこそハきこしめとの絵。
その日ハくらして、又のあしたま太宰まゐり給。
れいの家もおかしそうり。丁子まゐくそあこがらす
まちくひとへど、こ段やうるうなしまこさかへるいと
これまじげちり。女の御身ちりのめでたうしま
もとらず。おろくさうかまで行あらしようき
おもやをかへるいと、ころうひあり。見しうすへりと
ころまもまづこひしさ段いとあるまじきこもく
あげじろぞ。ふづありしようりハらうしさ。おさといと

[illegible]くもてなしてありまへりけるが[illegible]して[illegible]
[illegible]をして[illegible]もいひしをおぬ[illegible]もちろくまいり
りまして[illegible]八[illegible]のこうさく[illegible]へ乃
[illegible]すてし[illegible]けるあり[illegible]おふつゐでは
[illegible]星はあれ[illegible]この雲のうへにあるれて[illegible]
[illegible]あるこそいとおしうこゑれ[illegible]文の[illegible]
[illegible]をうそこも[illegible]をくしかさぐまり
おへるは[illegible]すてさせおへるやうはして[illegible]
ゆゑぬ氣色のこゑをがやうのあれ時ぐ[illegible]させ
給ハるんなるがしおろしてもて[illegible]
[illegible]ひも[illegible]じうしとのおへど[illegible]おやしく

なぞてかすて哥語りん内まではらくてらしは
つらそてとさぐも哥とよひ語めりしをあぐは
あり語しおりまどぞしそあるまゝそおし見
とそゞのしきこんぞれよりもあぞゝりと哥見
語ぞれよりハいりぞ哥まよりかずまへさ國も
ぞらんともぞくをくをくしてさつし婦べきゆう
かうまよそておげしめしかずまへさせ語らんを
そそうれしらば給べかれまうしてさも哥あられ語は
けんをどすそさせ語りんいうしこるてしまゐべりさ
けいきさせの代ずさだころかしころあろうとは
あげしうけざりそう並いぞうて一夜の心ざしの人は

なるんぞしつる愛もなぐさめまこんかしとお
ぼして此前をあやこつくりて、おしぶ風まおを
すかとこすれうちの人ハ心ことまよういまげり
ひとさ風こくうぐりなきまてなしまて、つる愛の
るゝハ左のおほい愛の君達などぬて拙いふけハひ
まれバつまだのまへまぬまて、おほうるまはまいり
なぐらこれ此るのげぎをりいかとのるく
ゆれバひとおぼしなくおきなびきてまろうち
志ゆかをとよりハとしおろし給てなんありつゞ
つゞき人どもぞしつゝんかしとぞひの君ぐちの
るとこやうま給とよりなしかを給こそげまつく

ゐしを給ひしかなどしたるまことをいふ人ぞ乃
けるひもおや（蓋ム）しうしやびかなおりしきれかたき
貞信にぞあるそのことなけれど世中の抽籤などし
しつゝしめやかなれいよりはゐまへりひ（女一）めしやも
あるかなはつゝしを給ひり大宮大将（蓋）のそなるなり
けるをとひ給ひ（女一ノ）ともまいりしかり大納言のきみ
小宰相の君に抽の給はんとなるこそは給めりつれと
きゝゆれバまめ（仲文詞）べのさすがに心とゞめて抽籤せる
こそ心ちをくれさしん人はくるしそれ心の目ども
見ゆしんかし小宰相などはいとうしろやすしと
のまてはたしうしなれどこれ君（蓋）をバ猶たづしく

人はよういろくてこしざんとおぼいふり。人よ（大納言詞）
まい心よをおもてづぐのちぎる言のりかべし。指従
ろ御やうしおもて。乗かけていでちぎし語あり
ありも待れど。例のめちれそうすぢよ尺待ぬまや。
（句）家をそいてく精（あけ）ちくおりしますとぞれいんを
ざるもうくしず待めれどうしげちさうくいひて
りへんば。さや（中文）もりうきおもて。（詞）いそこぐうしこされ
さ御をきしふしそれおりしきれいうでゝくふれ
らきやめなれんざうしやにられ人でまとのおよ。
（大納言詞）いをおやまここ徒よそこうく待しが。これ（善）ちね
或のちくちし語てし人（路）ハ。（白）家の内二条の小方（中）の。

此をとうとなりかりことゝいふなるべし。ひこちの
三紀のことなるまがしがめハなどしとも毋ともいひ結
なるハいかなるまゝ。それ女君は（大物云訶）（句）をそいと思ひて
おりしましかれ。（蓋）お母殿やきこつけ給こりけん。俄（ハヽ）は
むかへ給いんとて。まゐりめそへなどことくこゝく
じ給けるほどは。（句）家もいと思ておりしましなるが。
えいらを給ひずおやしきさ夜は此馬なるゝこゝを
給つゝぞ。へらを給けり。女（浮）も（句）家をしひきこえさせ
けるまやまはかるこさしうきまけるを。身なげこゝ
なめりとてこそめれとやうの人だにあるさまどひ結
かれと思ひ。（中文ム）家もいとおさましと思ひしてこれ（訶）ゝ

さうことはいふぞとよ。いとくあしく心うきことゝ
なさげりめげらうるらんことは。とのづからきそ
ありぬべき紙。大和(葉)もさやうよけいらで。世中乃
とうるくいらじきとく。かく宇治のうやのぞうの。余
ちじかくアけうこと紙こそいらじうるしと。さて
の給しうとの給。いさや(大納言詞)下もはうしうるらぬこと
ともいひ給ひ抱をとゝ心得れどうしこまもぐりけ
下(を)りしはのさぐこれごろ寧ねが里に出まうできて
ゐしうるるやうにこそいひ給ひれ。かくあやきう
てうせぬへうこと人にきうきじおどろくしく。
とぞきやうなりとて。いらじくうしけうことぐも

とや。さてくれしくはきりをなしぬるやありけんと
罕ゆれば。(中宮行)ぬしよりくりことゝまるぶなといはをよ。
くりすぢに此男をもてそこなひ。人にも心づき
なきものにしられぬべきなめりといふじうおぼい
たり。そのうち姫(女一)宮のれかるより。二(女二)宮にはきうそこ
まなり。(慧心)ぬてなどのいふじうをのしげなるを
ゑりまも。いとうれしくかくてこそとくゑるべり
なれとおぼせ。おまるおりしき忍どもおぼく。
大(昭名中宮)宮もこそまつらをまへり。(慧)大将殿うちまきりて。
(右物語なし)
おりしきどもあつめてまいらせ給。きり川のだ将の
と紙君の。女一の宮をかけたる秋の夕。雲に思(ゑび)繞て

出ていさゝかおもしろうきこゆるを、いとようく思
よきころ、まつだりおぼしあそびく人のあはれまし
うだく、思ふ身ぞくらおもしろき
萩のうは露かゝむすぶ秋風も夕ぞはき
て身をはなちけり、とりきてもそへましく
おぼしやど、さやうなるついたちころの氣色までもあり
すゞばいとゞつゝしげなる世なれば、さるなき
こともえはのめしいづまじく、うくよろづに
なまやゝやと、おほれをさひくのまでかむりしの人
ものし給ひまじくば、いかもしくはくぞ思ひ心
こけましや、ときのみかどの御むすめなかくも

えならずまし。又さる女人ありとききこしめし
おぢからもかくもおちららましなき。我こゝろうく
けが心ならず給けるかし。姫かゝるとおもひあまりては。
又こゝやの中人へまゐりくりて。忍しうちもいくらも
よりあさきことぞおこがましこゝまでくやしきこれは
しのびて。さしつぎよはおきましてこそせうし
人のほいと心おさなく。とゞころうちありけるか
ろぐし。候ばなかりし。さすがはいらしともなれ
なきふりけんほど。けがるしきれいなずと心の
さめくなげききげこそおきりけん。宿縁なさて給
さてもなれそれつ。さまりかりくあるぞ。ぞ

ころやすくらうこきくらひ人まてあらきんと
しまはいとらうこりし人をしまていけば旬
をもしまてしじ女(字)をもうしとしりじこゝ我ゑ様乃
よづりぬをこうりぞなどなずめいり給時ぞおほり
まころのどうまさ殿よくおまする人ごよかうう
すぢまは男もくるしきことをのづくまじかを
旬ふ
こやはましてなぐさめる給けゝれりこゝり
あるぬかなしさをもの給いげべき人さへなき我
さいのれ中ぐりこそはおもれなどのこまへど
ふくもこなれこ殿はざりけるうちつけのむつび
なればいとふくしもはかでかはあらんまこおほを

まつは恋しやいとゞやるせの給ひんまへりさかく
いさゝればしばしは祇王をぞ例のむりへさそ
祇けるにこれ人どもいさちりてめれとこれ人
わかりちんどりいそそおぼしかりしも恋がらく
て祇王はよそ人なれども祇くらひてありかよ
づぬ川のをともかれしに瀬もやありぬかれこし
祇王そちぐさめそれ心うくいとゞく御おそろしく
のこおぼして京はちんあや志さう京まてればさて
ぬかりけるに君どもありてさらへとのみへども
心はさりものまで人どものいさんこともさらすぢ乃
こともしづかめありはずきさこともあくんと

ちゝはげひさし男にて。母のこゝろやはまてんとなりん
おもむけられば。ひとよりあまり。さて人思はれども思ひし
つゝもんとの絹をきたり。心ばそゝくりかへなきをも
なぐさむやとて。思ひつゝりまとめて。まゐりぬ。これ
なげなくて。ぶるおもさだらうなうとゆうて今も
そ思はず。太物もつのは余りかなと。ころびとける
物の衣なり。いとやむごとなきまなびてめぬれ。
余りいとひさしやとへもいふね。やうく見とぞ
めでられど。おもをこまりし人はゆるえなまり
まりしおひありく。これ申うを絹ぬれ。武ア（蔵）の家の
れむすめの。まうしのふのゆかへをはめの思ひて

（武ア口小ちの君ぞむま）
きうとれ右馬のかみまで。人がらもことなることなき。こゝろかけたるをいとおしうなどもせてうて。さるべきさ海まなんちぎりと。（中宮ハ）きろしめすゝより
あていとおしうちく（武ア口）宮のいらじうりしづき給けるを。いとづらなるやうまもてなさんことなどの給ひきかれば。（宮ハ）いとこゝろがそくのみせなげき給
ひりさ海まてなつかしうかくしづるの給ひするなど。きうとれ侍従もいひて。（中宮ハ）これごろむり人さらをあてがり。（女一）姫宮のかぐまて。いとこゝよなりしぬれ
程の人なれば。やむごとなく心ことまてきふらひ
あふかぎりあれば。宮の君などうちいひても。（も）裳が

りひきうけ給ぞいと哀なりけり。兵部の宮。この君
ばかりやこひしき人（浮）にしたりそへ川べきさ夜し
さらん。ちくぜんはしらかくぞかしなど。例のれ心は
人をこひ給ようけても。人ゆりしきれんをやまで。
いかしかとれこころかけまてぞり。大将（意ん）もどかしき
までもおろかぎれ。きのふはしといふがり。甚宮
まやなどおぼし（或アヤノ）。我にもなしきぞまを給さうし。かく
りなき世のおとろへとこうまは。水のそこに身を
しづめてを。もどかしかしぬかぎにこそなど思ひ。
人よりは心よをきてしまへり。これ（六条院之）院におりします
とぞ。内よりもひろくおもしろくすこよき柄にして。

つゆましもさふらはぬ人どもく。これうちとけすゝ
つゝ。たるぐとおほかるこゝども。扇(らう)はる愛はこうち
たり。左(タ)右臣愛むかしのれけもひはもなとしら涙。
すべてかぎりもなくいとなまつうまつりこまふ。
いかめしうなりはたるれぞうなれば。中ゝいまし人
よりもいつ夜めしきことはまさりてさへなんあり
けるこれ宮(白)れいのれ心なしば。月ごろの御どもり。
いかなるすきごとどもをしいで給はまし。こゝはなく
しづまりぬて。人めはすくしおひなをりし給れと
ゝゆるをこれごろぞ又宮の君はなぞ御しられて
くづしひ御りき給けるすぐ(地)しくなりぬとて。ゝや(中宮)

うちに来り給ふなんとすれば、鮎のさり知業の比を
こゝろんこそなど、けうさ人ぞは口あしがりてこ
れ来りけどひこる比なり、水になれ月をめでく、
れあそびこゝぞ、つゐよりもい風めしなれど、この
白こやぞうるすぢはいとこゝになくまてやし給
給ひめなれてもなほい風こんなけ茶のさ風し
なへるに、大将の君はいとさしもいりこちなど
し給ひぬほどにて、そづしう心ゆるびなき物に
これしこりれいの二所来りなて、此前におもすう
ほどにかれ侍従もまれよりのぞきこてまつるに、
いけ方にもくらりてめでこき此すくをこしこる

さ海まて世(法ノ)まぞおもをましかしおさましくは
なく心うかりけるれ心かれなど人まはそのつくり
のことかけてしりがほまもいたぬことなれば心ひとつ
まあかずむ口いくさふ家(句)はうぢのれ抱紙などこ海
やかは罪しさきぬへば心海ひと取はこち(恙)出給こつけ(行法ん)
られなしじ志ぢしれたてをもすぐさず心あさし
とこしなしじとせへばかくれぬひんがしのつる殿
まあさまる戸口は人ごあまるぬて抱紙などしび
やかはしる取はおりして(恙ノ)なまがしをぞ女孫はむつま
しと気をべきや女ごまく心やすくはよもあらじ
し さすがはさるべからんことをしへ罪しぬべくもあ

やうくうしまなべかめれがいとなんうれしきと
のこまへがいと（へんん）いとへまくのこせふなりは弁（べん）乃
かとととてなれたるかとれそもむつましく世間也（弁のおりて付）
べきゆへなきひとれたぢ罪し侍しぬやはもれた
きしそは中々侍めれかなしずそのゆへたづ○てう
ちとけ御らんぜしるくましも侍し○ど・うぢうり
おもなく（面つよきんさ）いくりそめてげる身（おりとか後分と云こ）はおもざらんもうる
たらいたくてなんときこゆれがたづべきゆへあら（蓋付）
じと・せきざめなてげるこそくちおしかれなど・
の給つ（蓋ノ）これがかしこきぬはぬきまべし・さしやり
うちとけて・まなしひしけるなるべし・まぐ罪の

かたはすべて心もとなき菓の来ぐしをりて、もて
あそびかりとゝ也。うゝへは本丁のあるはしべりく
れ。あるはうちそむき。をしあけるやのうゝは
まぐさりしつゝねる。しらつきどもおしと
ゝわたしもて。硯ひきよをて
菓をゝれへしゝぐるく好遊はまし。家とも
[illegible]のあぐ名を秘はかけめや。うゝやすくはおぼ
さでと。こゝこれさうじはうしろしろ人はこせ
もへばこしろきなどもをず。のどうはいとくも
中物云 菓といへば名にそあぐなれ女房菓なべての
つゐはこぐれやかする

とゞこゝろかて、ぐゝをばなれどよしい
きて、おほくるとめやさしかれどもねんとも
結ハ夜のかりけるたまかつげれてぞこぼり
おくろなるべしとこゝろ、舟代おきまるは、ゆかぞりやう
なるおもこれどもまくて侍りとて
旅の心をてなる浅心こゝよそこ別へしそり内
多まうつりうけし涙、さて後さぞめこそしさまん
といへども
宿かさばひと夜ハ我なん世帰るとの業す
まつしぬこゝろなりともどあればおぼまうそぐりしめ
まきまふ、世帰る学道のさしらをこそ思え

さすれといふ。地ちうちきことをたゞすそしの給も。
人ハのそりきう肉ほしくのミ世家たり。心なし
こちあけ給りなんよ。つきてもかれ此地ひぢのゆへ
なるしバ。ほりぬべきありまぞあめるとてこちいで
多へバ。なしなべてくのそりなるしんと。おもひ
やり給ふそ心うかれとせんる人もあり。びんがしの
ううらんまをしうらまて。夕かげまなるまくま。
茅のひもとくれ前の草村をこゝろし給。ものゝミ
衣なるまなるまついて。かしつるとさゆかハ秋の
天といふことをいとしのびやうまどんじ。いく
ぬうまへり。おこつるきぬのをとなひしるさけひ

して、まやのれさうじよりとをりて、あるゝは
いるなり。句やのあゆゝおもして、これよりあるゝは
まりけるはこれぞさひこまへば、女一これれうの中ね
のさみとさゝゐなり。羞心れあやしのつぎや、これは
うとうりそめまも打ちふ人は、やがてうくゆうしげ
なくさゝゐるなぎしやといとおしく、これ句家は
これめなれてのゝ笑しなるべうめるをくちおし
ありさちてあるがちなるれもてなしは、女はさを
こそまけならめ、つがさを口おしうこれれゆうを
これ、わたく心うくのゝあるうれ、いうでこれつたり
まもめづらしうらん人のれいの心いれてさはぎ

給りんをうらしひとりて、ワが思しやうなり、やまと
うしずとごまもしまもをなしん、海ことよろろぐ者
あしん人は祇うるまぞよるべきや、されどうるい物
れ、人の心もとしまつけて、こひの中うるのかれ
る様をがふさりしかしぬ物まも学んして、いとびん
なるもひつびまなりけ、おほうるのおぼえをがふ御
しとしるがし、れさしもなちがうる物まおぼし
しりうるぞ、ありがたく衣なりけるさやうなるころ
ぐもある人、ごしの中まおしんや、いりこちて
ゆくこ〇がしらぬぞうし、孫気(ざめ)がちなりつれぐ
なるとしそうしはすきもなしもぐやなどなまふる。

いまはな紙つきなし。例のかしのけ（十二と三給ひし事）を。をし
まならひてけぎとおかしらるもあやし。姫（十一）文よるハ
あるるまけらしを給ふれば。人ぐ月こうとて。この
けに殿にうちとけて物語するほどなりけり。さうの
こといとなつしう。ひさまとさふつまをとおかしう
きこゆ。ふかけぬまよりおもして。なぞ（慧詞）くねる
ましがみまうきなるし給との給ま。これおどろ
かるべかれど。まこうしあげらるまぐれうちおろし
なぞもきず。おきあがりて。かるべきうれかるやハ侍る
へきといふこゑ。中将のおもとくいひつるなり
なり。まろこそハれもくかるのをぢなれとかるなき（慧詞）

ことをの給て、れいのあるこ（中宮の）まおりしますべかめる。
なまつ（薬司）ひざ紙かうれごろ、此里（ゼノ）どこのほどに、をさせ給
など、何ぢきなくとひ給、いづくにもくちまごと紙
かれ、こゞかやうにてこそいまぐさせ給めれといふ
に、おかし（薬ん）の此男のほどやとおもふに、まゞろたる
なげきのうちにすれて志つるも、おやしとしたる
人もこそとまぎらりしに、さし出たる（和琴）ほどんなくぐ
さなぐらかきなるし給、まちのしらべいおやしく
おりにあふとさくこゑなれば、さてまくもあらるど
ひきさして給ひぬを、中こなりと心いれたる人はまし
かへりしふ、ひが（薬）女（女三）宮もをとりあべき人かはしきけい

だらときこゆだらりのへぐそこそあれ。れ門くの
おばしうしづさしるさ風。ことくなるさりけるを。
ある紙（女一）このれあるりは。いとことなりけるこそあやし
かれ。おしの浦しうろまくうりける取れなど。
むけぐくることぐもま。紙（ほが）すく（女二ノ女）をはいとやんごと
なしうし。ましてなしべて（女一と）もちなしたとちふぞ
いとうるさや。こや（或ハ女）の君はこれましのこいまぞれ
うるしるりける。けうさ人ぐのけしひあまるして
月めであへり。いで衰是もまるおなじ人ぞうしと
ちいで罪して。みこ（或ハ）の世うし心よを給しまれをと
いひなして。そなるへおりしぬ。けうれおりしき

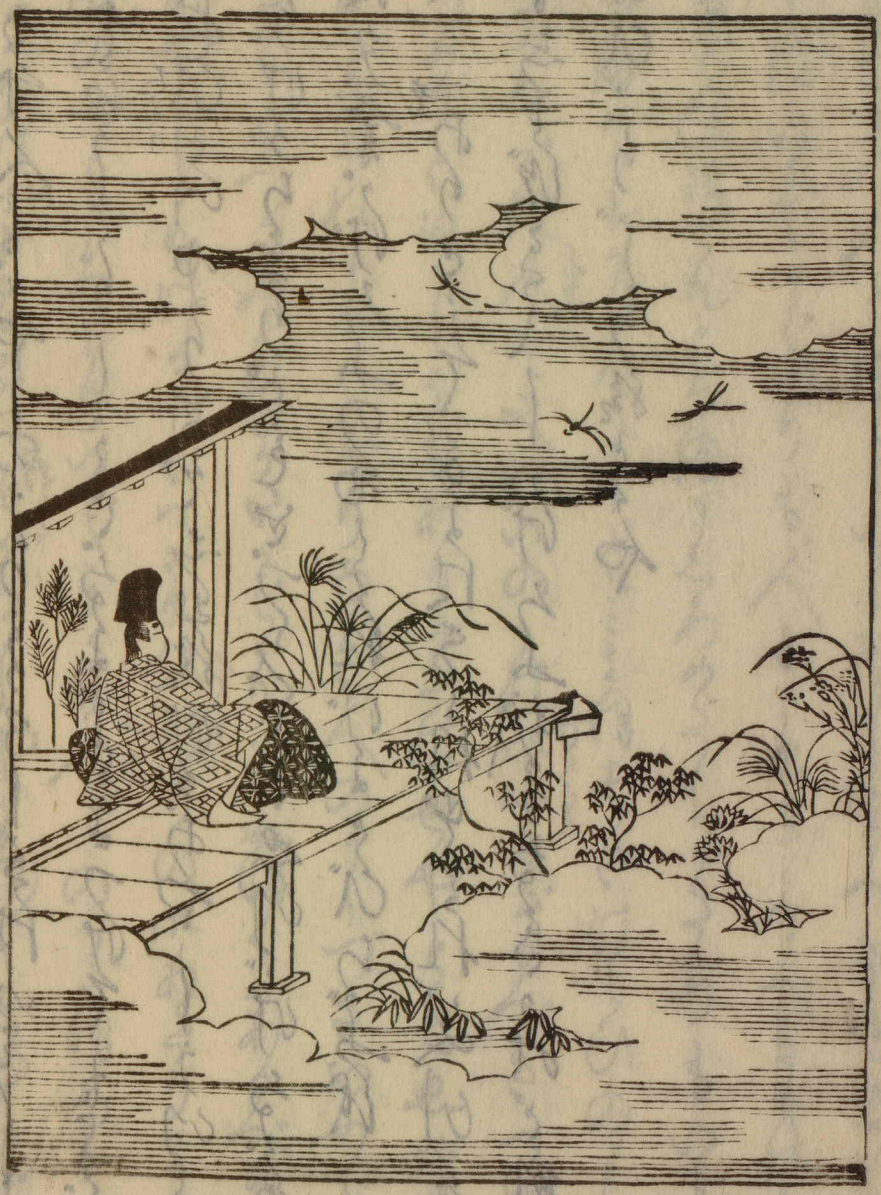
夜ねもぐるまで二三人出てありさなどしかるを
ミつけていろさ夜どもくらやうしこれぞよれ
つゐとしふこゝろおもてのすゝのまゝよりてうち
うはげくりぬへがぞうし（宗宏ノ如ぐう）ぬとなびくる人出さうり
人（蓋詞）しれぬ心ゝきなど罪しさを得れば中ゝこれ人罪
さをふるしつゝんことをうねくしきさ夜まて
まゐぶやうまなりしべり。まめやうまなんことより
ほか後もとめられ得るとのゝまへだ。君（宗宏ノ如ぐう）まもいひ
つゝへぞ。さしぶちて。いと（詞）おもほしかけざりし
此有様につけても。故宮（式アロ）のしきゝしさせまへりし
ことなどしぬへ出られてなんかくのゝおゝきゝ

さを給ふる所にしりうごとをもよろこびきこし給
めるといふ。（薫ん）なこくの人めさて心ちなれさ海やと
抱うそれば（詞）もとより見しまじきすぢより
も。いまはましてさるべきことにつけても。おもほし
こづ〇んなんうれしうるべき。うとくしう人づて
などにてもてなさせ給ひ。えこそとのまふり。
げ（女ごうん）とさまらぎて。（玄宗）思ひきゆるがすめれば。（玄宗詞）松も昔
のとのこちながめしるくりのも。もとよりなどのこまふ
すぢは。まめやかなこのもしうこそいと。人づてとも
なくいひなしまへるこゑ。いとけうやかなあつぎやう
つき。やさしきところそひたり。（薫ん）ぞなべてのうる

まこゝ此人とまたぐいとおしうるべきを。こゝぐい
まはいでかぎりも。人まこゝ思ふすべきも此と
なしひ給かんとな面うしろめたし。かたちもいと
な面めしかんかしと。こまほしきけしひのし
るを。これ人(家恵)ぞ又れいのか此(白ノ事)心こゝるべきつ面
なありと。おしうもありがたれ世やとも思ひ
ゆへり。これこそいかぎりなき人のうしづきおふし
こそゆへる姫恵。まるかぎりぞおほくいあるべき。
おやしかりけることいさるひ(八ノ事)ぎりのれあたりけり。
山のふところよりいできたる人(大中)ぞの。かたほなるハ
なゝりけることそ。これ(浮ノ事)ちなしやかろぐしやなど

四五十七終

志る寸人もかやうのうちうちしきは、いうじう
こそおかしかりしかど、ちまごとまつけても、こゝ
れひ（大くす）とのゆかりをぞ志出給けり。おやしうのう
かりけるちぎりどもを、つくぐと思ひぶけるがあ
給夕薯、かげろふの抱くれげまとびちがふ紙
（薯）ありとこそ、あまはさしれぞこれ、父の来
も志しぼきてしかげろふ、おかかちまきかれと別
のひこりごち給とかや



69038
6AP78